

21 日本近代洋画の父：黒田清輝

黒田清輝（1866-1924）は、鹿児島に生まれました。法律を学ぶためにフランス語を勉強し、17歳でフランスへ渡りました。

パリで法律を勉強していた黒田は、1886（明治19）年、画家の藤雅三（1853-1916）と山本芳翠（1850-1906）、パリで日本美術を広めた美術商の林忠正（1851-1906）から画家になることを勧められました。黒田の父親は黒田が画家へ転向することには反対していたため、しばらくは法律の勉強を続けながら絵画を学びました。しかし、1887年には法律大学を退学し、ラファエル・コラン（Louis-Joseph-Raphael COLLIN）（1850-1916）に師事して、絵画の勉強に専念しました。



KURODA Seiki
(National Diet Library, Japan)
黒田清輝（国立国会図書館）

黒田は1890年から1892年までの約2年半、日本人として初めて、パリから南東に約80キロの距離にあるグレー＝シュル＝ロワンに滞在しました。そこは、セヌ川の支流であるロワン川が流れ、静かで穏やかな光があり、北欧や米国の芸術家が滞在した芸術家村でした。黒田はここで明るい外光表現を取り入れた作品を制作しました。

1893年に帰国した黒田は、1896年に東京美術学校（現在の東京芸術大学）に設置された西洋画科の教員となり、後進の指導にあたりました。フランスには黒田の作品がないことから黒田の名は知られていませんが、日本には黒田が描いた有名な作品が残されています。日本の洋画（西洋からもたらされた油彩画）の発展に貢献したことから、黒田は「日本近代洋画の父」と言われています。

2001年、グレー＝シュル＝ロワンに、フランスで初めて日本人の名を冠した通りである「黒田清輝通り」が誕生しました。黒田の出身地である鹿児島から毎年フランスへ派遣される美術留学生がここを訪れて作品を制作し、鹿児島とグレー＝シュル＝ロワンとの交流が続いています。

掲載日：2022年12月2日